

二〇二三年度

併願優遇入試口・一般入試口 入学試験問題

国語（五十分）（全十四ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子高等学校

一

次の各文の太線の漢字の読みがなを書け。

- (1) 問題を穩便に解決する。
- (2) 万全の措置をとる。
- (3) 学問に携わる。
- (4) 密かに準備する。
- (5) 心の赴くままに行動する。

二

次の各文の太線のカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) ウイルスがカクサンする。
- (2) 小麦の値段がコウトウしている。
- (3) 犯人をタイホする。
- (4) カクゴを決めて挑む。
- (5) 納豆はハツコウ食品だ。

三

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

ごとうすず
後藤寿々は高校卒業後、消防学校で初任教育を受け、地域の消防署に初
の女性消防士として配属されたばかりで、まだ火災現場には行っていない。
勤務や訓練などの忙しい日々を過ごしている寿々は、この日仮眠室で過ご
していた。

その瞬間、仮眠室のスピーカーから警報が鳴り響いた。続いて寿々の
所属する隊への出場指令がアナウンスされる。出場指令が出たのは寿々
の隊だけではない。近隣の消防署、出張所にも出されている。火災発生
だ。

寿々は飛び起きた。階段を降り駐車場の奥にかけられている防火衣を
急いで着る。隊長や先輩が素早く防火靴をはき、ズボン、防火上着と着
ていくのを横で感じながら寿々も急いだ。訓練では着ることができてい
るのに緊張しているのか防火衣の上着の合わせのマジックテープがず
れてつく。慌てて直しポンプ車の後部座席に乗り込むと、「後藤、遅い
ぞ」と、助手席の中隊長から声が飛んだ。

サイレンを鳴らしながら車は走り出す。今までに何度も現場に出たが、
そのときとは明らかに雰囲気が違う。車内の空気が張りつめている。先
輩が消火栓を地図で確認している。

五分で現場に到着すると寿々の隊が一番乗りだった。寿々は降車した

ものの何をしていいのかわからなかった。少し先にアパートがあり、二階の左端の窓から白い煙が出ている。

「こら、後藤！」

先輩と呼ばれて我に返る。三連梯子はしごを下ろし、先輩と二人一組で梯子を担かつぐ。空いた右手で投光機のエンジンを持つ。

先輩のあとをついて走り出す。でもなぜか思うように走れない。足が動かないのだ。二十キロの防火衣を着て走り回る訓練を何十回やっただろう。その通りにすればいいだけのことじゃないか。そう自分に言い聞かせるのに重くて体が動かない。

アパートの前後は駐車場、隣に一戸建ての家があるが、それも空き地があつて離れている。風はないので延焼の危険はなさそうだ。

中隊長の声が飛ぶ。

「後藤は仁科にしなの後ろにつけ」

「はいっ」

先輩の仁科さんに従って梯子でベランダに上った。ホースをロープで固定しようとしたが、素早くできない。仁科さんがすぐに気がつき代わりに固定してくれる。

その間に空気呼吸器の面体めんたいをつけた別の先輩二人が、ベランダから煙の中に入っていく。①生き物のように自在に動くオレンジ色の炎がちらりと見えた。白い煙がものすごく熱い。この中に入っていくんだ。これは訓練じゃないのだ。寿々の手が震えた。訓練で何度も火を見てきた。

でもこれは本物の火事だ。失敗したら取り返しがつかない。

仁科さんの後ろでホースを持つ。平らだったホースの中に水が注ぎ込まれ、荒々しい力を持つ。猛烈な圧力がかかる。が、寿々が水圧を受ける体勢をとる前に水が放出された。そのせいで筒先が下に一瞬向き、水が跳ね返った。

「後藤！」

仁科さんが怒鳴った。

十分で鎮火した。一室の一部が焼けただけで済んだ。住人である年輩の男性は自分で逃げて無事。原因はコンロからの燃え移りらしい。火が見えなくなっても、火の出る可能性が完全になくなるまで水をかけ続ける。現場調査の間、寿々は黙々と資機材を片付け、ホースをひとつひとつ巻き取る。署に戻ると、明け方の四時を過ぎていた。

シャワーを浴びてからすぐに朝食を作り出す。死傷者が出なくて良かったが、②今見たオレンジ色の炎が、まぶたの裏でちろちろ燃えているようだ。食堂室のテーブルについて先輩も黙りがちだ。

食器を片付けて事務室に戻った寿々を、中隊長が呼んだ。

「後藤、ちよっと」

いつもの顔と違う厳しい表情だ。

「最初だったから相当割り引いても、補助もできないとはおまえ、ひどいな。失敗は許されないんだぞ。一人でもミスすれば他の隊員の命も危

険にさらすことになるんだ。わかってるのか」

他の先輩たちはそれぞれ仕事をして寿々の方を見ていない。でも中隊長の言っていることは当然だという雰囲気は漂っている。

返す言葉もなく、寿々はうなだれた。中隊長は厳しい表情のまま、寿々を見つめている。

「ここに来て半月たつが、おまえ、よくぼんやりしているだろ。何か文句があるなら言えばいい。言いたくないなら言わなくていい。とにかくもっと本気を出せ」

③うなだれたまま寿々は少し驚いていた。そんな風に見られていたなんて思わなかった。配属されてから自分なりに頑張ってきた。及第点は当然もらえていると思ひ込んでいた。

「女だからすぐ予防に異動するだろうとか、資格とって救急に回るとか色々考えているのかもしれないが、ここにいる間は、精一杯の責任を果たせ。後藤が消防士だからっていつてるんじゃないぞ。おまえは社会に出たんだ。学生じゃないんだ。自分の責任を果たして金をもらう立場になったんだ。自分の仕事に全力を尽くすのは当たり前のことじゃないか」「すみません」

寿々は頭を下げるしかなかった。

(中略)

二度目の火災現場出場は一週間後だった。

今度は仮眠中ではなく昼の弁当を食べているときで、全員が一斉に事

務室を飛び出した。階段を降り、防火衣を着てポンプ車に乗り込む。現場は分譲住宅地の一角で二階建ての家。火災報知器が鳴っていることに気づいた近所の住民が通報してきた。

(中略)

消火が始まる。寿々にはホースの補助につく指示はなく、延焼の見張りを命じられた。風はほとんどない。庭もあり、隣家とも離れている。それなのに延焼の見張りというのは一線から外されたのだとわかる。前回の雪辱戦にはまだ早いと自分でも思っていたが、外されたと思うと悔しかった。

放水が始まるとすぐに煙は消えた。

「後藤、念のためシートをかけておけ」

中隊長の指示を受け、寿々は玄関から一階に入った。放水された二階の部屋の真下は和室で、タンスや棚が置いてある。天井から水漏れがしている。寿々は家具が濡れないようにブルーシートをかぶせた。

その部屋の隅に電子レンジほどの大きさのダンボールの箱があることに気がついた。開いているフタから中をのぞくと、何かと目が合い、どきとした。犬だ。ミニチュアダックスフントの仔犬だ。黒く潤んだ目をして寿々を見上げている。不安なのか体は小刻みに震えている。このままでは水がかかってしまうかもしれない。

ダンボール箱を抱えて玄関を出た寿々に、

「後藤、何を持ってるんだ」

すぐ先輩がやってきた。

「犬がいたんです。濡れるとかわいそうだと思いました」

すると、最初に中隊長と話をしていたエプロンの中年女性が飛び出てきた。

「わんちゃん、大丈夫でした？」

「ご存知なんですか」

先輩が尋ねると、女性は「よかった」といいながらほっとしたように胸の前で両手を合わせる。

「このお宅で最近飼われ始めた犬なんですよ。おととい見せてもらったばかりだったから心配だったの。ご家族の方はこの時間、お留守でしょうけど、わんちゃんは中にいるはずだから大丈夫かなと思って」

「ご近所の方ですか」

先輩が訊くと、

「ええ、すぐその者です」

エプロンをした女性は斜め前の家を指差して名乗る。

「もうすぐご家族の方が戻ってこられますから、それまで預かってもらえますか」

「もちろん構いませんよ」

女性は快く頷くとダンボールを受け取った。

（中略）

それから二日たった日勤日の午後。事務室で書類作成していると、客

がやってきた。前回の出場で、火事を起こした一戸建ての主婦と小さな男の子だった。

「このたびは大変ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

主婦が廊下で深々と頭を下げている。応対に出た中隊長は、「まあ一室だけで済んでよかったですね」といったが、すぐに厳しい口調になった。

「火災報知器の音に、たまたま近所の方がすぐに気がついてくれたから、あれで済んだんですよ。吸殻の始末ができないなら、タバコは絶対やめるべきです」

火元はベッドサイドのテーブルにあったタバコの灰皿だった。吸殻が山になり、完全に火種が消されていなかったことから、他の吸殻に燃え移った。テーブルと壁を少し焼いただけで済んだのは、通報が早かったおかげだ。

「すみません。主人も反省しています」

主婦は消え入りそうな声でいうと、もう一度頭を深く下げた。

「それからあと、犬のことなんです。すぐに外に出して下さって、本当にありがとうございます。実は子どもにせがまれて飼い始めたばかりの犬で、火事の知らせを聞いたとき、犬はどうなった、どうなったって、もうパニックみたいになってしまったんですけど、すぐにお向かいの家に預けてくださったそうで本当に助かりました。それでどうしてもお礼を言いにいきたいと息子がいいまして、こちらにうかがったんです」

「おい、後藤」

机でパソコン入力をしていた寿々が呼ばれた。

「犬を外に出したのは、こちらの消防士です」

主婦は寿々を見ると、驚いた表情を浮かべた。

「女性の方だったんですね」

寿々は「どうも」と頭を下げた。すると主婦の隣に立っていた幼稚園

くらいの子どもが寿々を見上げて大きな声で言った。

「ジョンを助けてくれて、どうもありがとうございます」

④男の子はぎこちないけれど、ていねいなお辞儀をしている。

「そんな、たいしたことはしてませんから」

寿々はとまどった。お礼をいわれるほどのことはしていない。

それでも感激して思わず目が熱くなる。⑤慌てて奥歯を噛みしめた。

二人が帰ると、中隊長が優しい顔に戻って寿々に笑いかけた。

「もつと頑張れよ」

(魚住直子「卒業」より。なお、本文には省略等がある。)

問一 傍線①「生き物のように取り返しがつかない」とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 寿々の目の前でつぎつぎと燃え広がっていく火災現場のひっ迫した様子を、寿々の目線を通して実況することで、写實的に表現している。

イ 火災現場で思うように行動することができずに焦りを感じている寿々の思考を、複数の短文で表すことによって、臨場感豊かに表現している。

ウ 失敗続きの火災現場で何とかして挽回しようと奮闘する寿々の様子を、主観と客観の視点を交差させながら描くことで、生き生きと表現している。

エ 消火活動にあたる先輩の消防士たちの活き活きとした様子を、寿々が訓練を回想する様子と重ね合わせることで、印象的に表現している。

問二 傍線②「今見たオレンジ色の炎が、まぶたの裏でちろちろ燃えているようだ」とあるが、この表現から読み取れる「寿々」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 消火活動は無事に終了したが、訓練通りに行動することができずに先輩たちの足を引っ張ってしまったことを後悔している。

イ 死傷者は出なかったが、中途半端なままで消火活動を終了することになってしまったことに憤っている。

ウ 今回は自分の役割を全うできなかったが、次に出場する際はきつと挽回しようと意気込んでいる。

エ 消火活動に時間はかからなかったが、中隊長や先輩たちと連携しながら行動できなかったことを恥じている。

問三 傍線③「うなだれたまま寿々は少し驚いていた」とあるが、「寿々が「少し驚い」たわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 消火活動における寿々の行動に対して中隊長から注意をされると思っていたが、そうではなかったから。

イ 消防署に配属されてからの努力を先輩たちから評価されていると思っていたが、そうではなかったから。

ウ 仕事に全力を尽くすことで一人前の消防士として認められると思っていたが、そうではなかったから。

エ 中隊長以外の他の先輩たちは寿々の行動をフォローしてくれると思っていたが、そうではなかったから。

問四 傍線④「男の子はぎこちないけれど、ていねいなお辞儀をしている」とあるが、この表現から読み取れる「男の子」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 母親が叱られる姿を見て恐怖を感じているが、何とかして許してもらおうと一生懸命謝罪しようとしている。

イ たくさん大人の大人に囲まれているため緊張しているが、自分も大人の一人になろうと大人の真似をしている。

ウ 不愛想な挨拶をする寿々を見て困惑しているが、最低限のお礼を伝えるために大げさな態度で表現している。

エ まだ子どもであるため表現はたどたどしいが、犬を助けてくれた寿々に精いっぱい感謝の気持ちを伝えようとしている。

問五 傍線⑤「慌てて奥歯を噛みしめた」とあるが、このときの「寿々」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 火事を起こした家の主婦と男の子が尋ねてきた先が、中隊長や先輩たちではなく自分であったことを知り、誇らしい気持ち。

イ 火災現場で犬を助けるという行動が、火事を起こした家の男の子にしか評価されなかったことを、悔しく思う気持ち。

ウ 中隊長や先輩たちと力を合わせて行った消火活動が、うまくいったのだとようやく実感することができ、安堵する気持ち。

エ 火災現場で自分がとっさに取った行動が、男の子の大切なものを救うことにつながったことを実感し、嬉しく思う気持ち。

四 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

57 ①めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲隠れにし
夜半の月かな よは 紫式部

(中略)

これは『源氏物語』の作者として知られる紫式部が詠んだ歌です。直訳すると「夜空に現れた月が『ああ、月が出ている』ということすらも気付かないくらい、すぐに雲の影に隠れてしまったよ」という意味になります。この歌を解釈するヒントになるのは 詞書ことばがき（歌が詠まれた場所や日時、状況などが書かれた前書き）です。「ずっと以前から幼友だちだった人と久しぶりにあった」という内容であることから、月を友人になぞらえた歌であることが分かります。意識すると「久しぶりのあなたと会えてとても嬉しかったのに、時間が幻のように過ぎてしまった。もつと一緒にいたかったなあ」という意味になりますが、おそらくみなさんも同じような気持ちになったことがあるのではないのでしょうか。

(第一段)

仲のいい女友だち同士で女子会を開いたときなど、おしゃべりに夢中になってあつという間に時間が過ぎる。でもみんなが帰ってしまうと、「さっきの楽しかった時間は、はたして現実だったのだろうか」と急に寂しくなったりするのではないでしょうか。この歌に詠まれている気持ちはそれにとっても近いように思われます。(第二段)

29 心あてに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊
の花 おおしこうちのみつね 凡河内躬恒

(中略)

(中略)

これは初霜が降りて一面真っ白になった晩秋の庭に、白菊が咲いている情景を描いた歌です。「霜の白さと菊の白の見分けがつかないから、あてずっぽうに手を伸ばして折ってみようか」と作者は言っているのですが、「いくら霜が降りたからといって、霜と白菊の見分けがつかなくなるなんてことはありえないのでは？」と感じた人も多いのではないのでしょうか。(第三段)

明治期の歌人、正岡子規まさおかしきも同じ疑問を感じたらしく、自著『歌よみに与ふる書』のなかで「こんな見え透いた嘘うそは、虚構としても成立していない。ただのつまらない嘘だ。これは駄歌である」と、手厳しい評価を下しています。正岡子規に酷評されたことによって、それ以後この歌に対する世間の評価は急に下がってしまったそうですが、この歌は本当に正岡子規がいうように嘘の風景を詠んだ駄作なのでしょうか？ ぼくには作者は決して嘘の風景を読んだわけではなく、実際にそう見えていたようにも思えるのです。(第四段)

秋の早朝に戸を開けてみたら、美しい初霜の風景がいきなり目に飛び込んできた場面を想像してみてください。電気のない昔の家は今よりず

つと暗かったことを思うと、いきなり明るい場所に出た作者は、眩しく
て目がくらんだようになったと考えられます。目が慣れてくると、やが
てそれぞれのモノの形はつきり見えてくるのですが、この歌はその直
前、真つ白な風景が目飛び込んできた瞬間をとらえたものと考えるこ
ともできる。(第五段)

もちろん目がくらむのはほんの一瞬で、白菊を折ろうと手を伸ばすこ
ろには目も慣れていたと思われますが、おそらく作者は「どうすればあ
の一瞬の感動を、鮮烈なイメージとして心の中に留めておくことができ
るだろう?」と考えた。そして実際に見た風景を一度自分の心の中に取
り込んで、言葉を使って心象風景として再構築した結果、「霜の白さと
白菊の白さの見分けがつかない」という表現に行き着いたのです。(第
六段)

みなさんの中にはインスタグラムをやっている人もいると思います。
画像をアップロードするときに、「インスタ映え」を考えてコントラス
トを強くしたり、色調を変えたりすることがあるのではないのでしょうか。
それはなぜか? 決して嘘の画像をみんなに見せたいから、ではないは
ずです。「こんなに素敵で美しい景色があったよ!」という感動を、よ
り鮮烈なイメージとして誰かに伝えたいからこそ画像を「盛る」のでは
ないでしょうか。②それと同じことをこの歌の作者はやったのです。(第
七段)

おもしろいことにインスタグラムと和歌には、ほかにも共通点が見つ

かります。紫式部の歌を紹介したときにふれたように、和歌には、その
歌が読まれた場所、日時、状況などを書いた「詞書」が添えられている
のですが、これは「#(ハッシュタグ)」と同じですよ。そういう意味
で、和歌は「言葉のインスタグラム」と言ってもいいのかもしれない。

(第八段)

(中略)

以上で多くの百人一首の解説はおしまいです。最後に「③今の時代
に百人一首を読むことの意味」について、自分なりに考えていることを
お話しさせてください。今回番組に出演するにあたって、改めてよくは
「百人一首とは現代人にとってどんな意味をもっているのだろうか?」と
自分に問いかけることになったのですが、そんななかで、頭に浮かんだ
のが「感覚のアーカイブ」という言葉でした。アーカイブとは「重要な
記録を保存し、未来に伝えること」を意味します。(第九段)

百人一首に収録されたそれぞれの歌の中には、『万葉集』の時代から
鎌倉初期までの五百年以上の間に人々が何を見て、何を聞いて、それを
五感でどうとらえて、そしてどう思ったのが、すべて詰まっています。
そこには苦しみの記憶さえも記録されています。タイムマシンで時間を
遡さかのぼらなくても、気軽にそれを追体験できるのが感覚のアーカイブとし
ての、百人一首の魅力であるのは確かでしょう。(第十段)

では、昔の人の感覚を知ることによって、私たちは何を学ぶことがで
きるのでしょうか? ここまでお話ししてきたように、百人一首を読ん

でいくと、空想の世界に遊ぶことの楽しさ、言葉で何かを表現することの喜び、この世界をラクに生きるための心のあり方などなど、現代人が忘れてしまった大切なものにおのずと気づかされることになります。そうした気づきこそが学びであり、感受性を磨き自分を成長させることにもつながっていくとぼくは思っています。(第十一段)

とはいっても、単に和歌を素読みしているだけでは、昔の人の感覚は自分の中に入ってきてはくれません。何度も何度も読み返してイメージーションを膨らませていつてはじめて、昔の人の感覚を疑似体験することが可能になり、やがては忘れてしまっていたモノの見方、考え方が自分のものとして身についてくるのです。(第十二段)

感覚のアーカイブとは、長期保存のために凍らされた冷凍食品のようなものだと思うください。そのままでは堅くて食べられませんよね。普通の冷凍食品ならば、電子レンジですぐに解凍できてしましますが、百人一首は、自分の力でなんとか解凍するしかないのです。そこで必要になるのが「もつと知りたい、学びたい」という情熱です。歌が詠まれた歴史的背景を調べたり、歌人が歩んだ人生を自分なりに想像してみたり――。熱意を持って百人一首を読み込んでいけば、やがては氷が溶け出して、百人一首を美味しくいただけるようになるのです。(第十三段)

(木ノ下裕一『百人一首』古典と友だちになる)より。

なお、本文には省略等がある。

問一 傍線①「めぐり逢ひてゝ夜半の月かな」とあるが、この歌を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 作者の気持ちをはっきり述べた前書きを置くことで、月が沈む様子を詠んだ歌を、情緒あふれるものになっている。

イ 月に自分の心情を投影することで、楽しい気持ちを詠んだ歌を、友人との別れを惜しむ歌とも詠むことができるようにしている。

ウ 歌を詠んだ状況をあらかじめ示すことで、情景描写だけの歌を、友人への気持ちを詠んだ歌として解釈できるようにしている。

エ 自然を人にみたとて表現することで、平安時代につくられた歌を、はつきりと当時の光景が浮かぶものになっている。

問二 この文章の構成における第四段の役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 歌に対する疑問を述べた第三段を受けて、他者の見解を引用した上でそれに反論することで、筆者の考えを強調している。

イ 歌に対する疑問を述べた第三段を受けて、具体例をいくつかあげることで、多様な考え方を中立的な立場から説明している。

ウ 歌に対する疑問を述べた第三段を受けて、筆者の考えを補強する意見を抜粋することで、自分の主張を確かなものになっている。

エ 歌に対する疑問を述べた第三段を受けて、直前の内容を否定している意見を紹介することで、話題の転換を図っている。

問三 傍線②「それと同じことをこの歌の作者はやったのです」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 歌の作者が本来はあり得ないような状況を詠んだのは、現代人が虚栄心を満たすために、実際よりも良く見せるのと同じだということ。

イ 歌の作者が本来はあり得ないような状況を詠んだのは、現代人が見る人に喜んでもらうために、画像に調整を加えるのと同じだということ。

ウ 歌の作者が本来はあり得ないような状況を詠んだのは、現代人が多くの人に見てもらうために、奇抜な写真をインスタグラムに載せるのと同じだということ。

エ 歌の作者が本来はあり得ないような状況を詠んだのは、現代人が効果的に感動を伝えるために、画像を加工するのと同じだということ。

問四 傍線③「今の時代に百人一首を読むことの意味」とあるが、これに対する筆者の考えはどのようなものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 昔の文章における工夫を取り入れることによって、イメージが膨らみ、かえって最先端の流行を生み出すことができるという点で意味があると考えている。

イ 簡単には理解することのできない歌を解説する中で、学習に対する意欲的な姿勢が身につき、他教科の学習にも活かすことができるという点で意味があると考えている。

ウ 昔の歌を読むことで、現代に生きる私たちにも通用する感覚に気づくことができ、感性を豊かにすることができるという点で意味があると考えている。

エ デジタル化が進み紙が失われていく現代で、重要な記録を風化しづらい歌という形で保存し、未来に伝えることができるという点で意味があると考えている。

問五 国語の授業でこの文章を読んだ後、「感覚のアーカイブ」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。 や 「などもそれぞれ字数に数えよ。

〔五〕 次のAは、兼好法師が書いた『徒然草』の原文であり、内の

文章はその現代語訳である。Bは、その鑑賞文である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

A

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、aなほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、「障ることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは、さることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし」などと言ふめる。

よろづのことも、初め終はりこそbをかしけれ。（中略）

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる群雲隠れのほど、またなくあはれなり。榎柴白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ。

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は聞のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

桜の花は満開だけを、月は曇ったところが何一つもなくはつきりと見える時だけを見るものなのだろうか、いや、そうではない。雨が降っている夜に、見ることでできない月の姿を恋しいと思い、（理由があつて）部屋に閉じこもり、春が過ぎ去ってしまうのを全く知らないでいるのも、やはりしみじみとして趣が深いものだ。満開に咲き誇っている桜よりも、今にも咲きそうな桜の梢や、逆に満開をもう過ぎ去ってしまったて、散りしおれてしまった庭などのほうが、見どころが多いものだ。和歌の詞書にも、「花見に行つたのですが、考えているよりも早く散つてしまつていたので、それを歌にしました」とか、「都合の悪いことがあつて、花見に行くことができず、家にいた気持ちを歌に詠みました」といったように書いてあるのは、「花を見て歌を詠みました」と言っている歌より、情緒が劣っていることがあるのか、いやあり得ない。花が散つてしまふ姿や、月が西の空に傾いていく様子を、名残惜しく感じてしまふ風潮はもつともなことであるけれども、特に教養のない人ほど「この枝も、あの枝も、散ってしまった。今はもう、見るところなど何一つない」な

どと、言ってしまうようだ。

何事においても、始める時と終わる時が、特別に趣深いものなのだ。

(中略)

月についても、満月の曇ったところが全くなく、すっきりと明るく美しい姿ばかりを、ずっと遠くまで眺めているよりも、明け方が近くなって待っていた月がようやく姿を現し、その姿がとても趣深くて青みを帯びたような姿で光り、深い山奥の杉の梢の隙間からちらっと見え隠れする、木々の間からこぼれ落ちる月の光や、さつと小雨を降らせた雲に隠れたり、また現れたりする月の姿は、この上なく情緒深いものだ。椎柴や白樺の、まるで濡れているような葉の上に、月の光が輝いてきらめいているのは、その美しさが身にしみるようでいて、これを理解してくれる情緒を理解している友達が今そばにいてくれたらなあ、とその友達がいる都が恋しく思われてくる。

全て、月や花というものは、そんなふうに見ただけで見るものなのだろうか。いや、そんなことはないだろう。春はわざわざ家から出ていなくても、月の夜は寝室の中にいたままでも、月や花の姿を想像して楽しむのは、直接見るよりもかえって心が豊かになって、趣深いものだ。人格や教養に優れている人は、むやみに物を好むようには見えないし、物を面白がり、楽しむ様子もあっさりとしている。田舎に住んでいる教養のない人ほど、そういうことにかえってしつこく、何事もおもしろがってもてはやす。教養のない人たちは、花見に行けば、花の木の下で自分

の体をねじ込ませるように割り込んで行って、わき目もふらずにじっと見つめ続け、酒を飲んだり、連歌をしたりして、しまいには大きな枝を平気で折り取ってしまう。春だけでなく、夏には泉に手や足を突っ込んでひたして涼をとり、冬には真つ白な雪原に下り立ち、自分の足跡を付けようとするなど、すべての物事において、少し離れた場所から見て楽しむ、という態度がない。

B

兼好法師独特の芸術論が展開される「花は盛りに」。

「よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ」と書いてあることから、「始まりと終わり」という、人の心に印象深く刻まれ、心を揺り動かされる時に人は情緒を理解するのだと、言い切っています。

これは確かにそうですよね。物事の始まりと終わりは、特に印象深いものです。人間関係に置き換えれば、出会いと別れ。また、文化祭や何かしらのイベントも、楽しいのは本番ではなくその前の準備段階であり、終わりの後片付けのほうが妙に心に残っていたりするものです。

①夏休みもそう。始まる前と始まった当初はあんなにわくわくしていたのに、始まってしまえば時間の進み方が速くなってしまいい、終わる最後の一週間ぐらいになって、「ああ、終わってほしくないなあ」と思う気持ち湧き上がってくる。

本来ならば、その期間を思いきり楽しめばいいのに、楽しい時間は早

く過ぎ去ってしまうものです。待ち構えている事前の時間と始まった瞬間や、終わった瞬間、終わった後の思い出す時間のほうが、圧倒的にイベントそのものよりも長くなります。物事の始まりと終わりの時間を「ああ、あの時はよかった」と心の底から思うことが、兼好法師の語る風情なのです。

月も、満月よりも三日月のほうが情緒を感じると兼好法師は言います。花は、満開よりもつぼみが膨らんでいく最初の時間と、花びらが散っていく最後の時間のほうが興味が惹かれていい、と。ということは、兼好法師が評価していないものというのは、②や③。盛りの、いちばんいい時であり、何もかもが完全に完璧であるように思われる、みんながいいと絶賛しているものを、評価外としています。

こう考えると、朗らかで明るい兼好法師の姿にも、ひねくれ者の一面が見えてくるから不思議なものです。からりと明るい面の印象が強い兼好法師ですが、人が決して完璧な存在になれないように、兼好法師にも欠点がありました。みんなが「いい！」と口をそろえて言うものには、どうしても同意する気になれないひねくれた部分であり、人とは違うことを言いたいし、違うことをよしとしたい気持ちが見え隠れします。

(中略)

不完全なものに、心が惹かれる。完全なものには、全く心が動かない。本当に？ とちよつと質問してみたいです。

(松村瞳『古典の裏』より。なお、本文には省略等がある。)

問一 波線部 a「なほあはれに」・b「をかしけれ」を、現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。

問二 傍線①「夏休みもそう」とあるが、傍線①を含む段落の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 現代の具体例を挙げることで、兼好法師独特の芸術論は現代にも通じる認識が含まれていることを示している。

イ 現代の時間の流れを挙げることで、兼好法師の時代でしか味わえなかった独特の時間の流れがあることを示している。

ウ 古典の時代にはなかった考え方を挙げることで、兼好法師の芸術論が普遍的なものとはいえないことを示している。

エ 個人的な体験を挙げることで、兼好法師の芸術論を自分の生活の中に取り入れた変化を示している。

問三 空欄②・③に入る語句として最も適切なのは、次のうちではどれか。二つ選べ。(順不同)

ア 満月 イ 満開の花々 ウ 三日月

エ つぼみが膨らんでいく最初の時間

オ 花びらが散っていく最後の時間

問四 二重線部「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは」に

ついて、

(1) 生徒たちが述べた感想の中から、本文の内容に合致しているものは次のうちではどれか。

ア 月や花は、目だけで味わうよりも体全体で味わった方がおもしろみがある、というのはもっともだね。月は触れられないにしても、花や雪は、手や体で触れてこそ、本物を味わったといえるよね。

イ 月や花は目だけで味わうものではない、想像して楽しむものでもある、という記述にははつとさせられたよ。教養ある人は、鑑賞するものから少し距離を置いて楽しむことも知っているんだね。

ウ 後世の人びとに美しい月や花を遺^{のこ}していくためには、兼好法師のように自然保護の思想を持つことが大切だね。特に、物事の開始と終了の時においては、準備と片付けを慎重に行う必要があるね。

エ 兼好法師が沈みゆく月や散りゆく桜を好んでいなかったのは、物事の終わりに人生のはかなさを重ねていたからだね。だから、見えないものに心を寄せることで寂しさを紛らわそうとしたんだ。

(2) Aの原文中に付された点線のうち、兼好法師の芸術観に合わないものは次のうちではどれか。

ア 雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬ

イ 望月の隈なきを千里の外まで眺めたる

ウ 椎柴白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたる

エ 春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へる

問五 兼好法師の『徒然草』は、『枕草子』・『方丈記』と並んで、「日本

三大随筆」と呼ばれている。そのうち、『枕草子』の「作者」および「作品の冒頭」として最も適切なものを、次のうちからそれぞれ選べ。

「作者」

ア 鴨長明 イ 小野小町 ウ 清少納言 エ 紀貫之

「作品の冒頭」

ア ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。

イ 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて…

ウ 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。
ぎをんしやうじや

エ 月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。
はくたい